
I S 転生者の夢

狸吉商店

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS 転生者の夢

【Nコード】

N6768Y

【作者名】

狸吉商店

【あらすじ】

俺死んじやった。テヘッで始まる物語。

1

「兄さん、おはよう。」

「ああ、おはよう。」

笑顔で挨拶をしてくれる我が妹奏。我ながらいい妹を持った者である。

「今日も学校？」

そうだよ、と笑いながら朝メシのトーストをかじる。いつも通りの朝、これほど気分がいいものはない。

鼻歌を歌いながら家を後にする。駅まで徒歩五分、実に近い。二分ほど歩いた時ふと、あることに気づく。

「あっ論文忘れるところだった。」

これでも東大生である。夢は殺人ウイルスを作ることである。

この目標のために毎日を一生懸命に生きている。

慌てて引き返し、論文を取りに行く。MYルームは日当たりのいい二階である。

そのために毎日つらい階段を上っている。

インドア派には実につらい。軽やかなステップで階段を上っていた。それが幸いして足は宙を舞った。少しの浮遊感、そして大きな衝撃。首から床に落下した。鉄板をたたいたような音がした。そして想像を絶するほどの痛み。

意識がブラックアウトした。畜生、まだ死にたくないよ。

1（後書き）

処女作なので暖かく見守ってください。

2

皆さんは「神」というモノを信じれるだろうか？

私は信じれない、いや信じれなかった。

一面白の変な場所につれてこられて一見じじいの「神」とやらに生まれ変わらせてやる。

チカラもやると言われた。だが俺の人生は神様達の遊びとなっているようだ。

だが同じ世界にはいけないらしい。俺の知らないどこかの世界のラダムで行くそうだ。

せっかくならもらおうと言うことで厚意に甘えさせてもらった。

チカラは自由を選べた。学生は知識が必要。だからこの世の知識すべてよこせと言ってやった。そしたらこう言いやがったんだ。

「すべてはムリだね、すべてだと無限になってしまう。まあ少しならいいけどね」

あんまりない草にちよつとムカツときた。

「おい神、別にいいだろ。おまえ神なんだからどうにかしろよ。」

「ムリだよ」

この言い合いが数分続いた。

「じゃあ俺の部屋にあるゲームの知識にしてくれ」

「では、ガンダム00とSEED、ゴットイーター、マクロス全般とかあと、その他になるがいいかな」

「ああ」

これほどの知識があれば世界も侵略できるんじゃないかと思う。でも「神」はこれでは少なすぎるといわれて追加でオラクル細胞とアラガミコア、V型ウィルスをもらった。どうやら神様たちの遊びだそう。そして俺の運命に「転生」というのが入れられた。これは死んだらまた転生するというやつだ。でもチカラはその人生でとれだけ「神様達」を楽しませたかによって決まるみたいだ。でも、生まれた頃からこんなモノを持っていたらいろいろとヤヴァイと思う。だけど「神」がどうにかしてくれるらしい。

だけど話がすんだら突然おれを開く床で落としやがったんだ。そしてたたいま落下中である。気絶しそう。これこわすぎ。もう気絶しそう。とか余計なことを考えていたら突然の衝撃が襲ってきた。階段から落ちたのとは比べようにもならないほどの強さ。体がグチャグチャになった。なぜわかるのかというと、別の視点からこの顛末を見ていたのである。そして新しい俺のカラダは消えていった。

どこか暖かくそしてほのかに明るく、それでいてなぜか安心する、水の中のような浮遊感。ここにずっと居たいと思わせる不思議な場所。そこは人間がみんな生まれる前に胎児として居るはずの場所、

子宮。俺は今そこに居る。きっと生まれ変わったんだろう。あれ本当
に神だったんだな。ちょっと安心した。
まあべつにいいや、一眠りしよう。

MYネームイズイオリア・シュヘンベルグちゃん三歳です。

毎日毎日同じことの繰り返しで参っちゃう。

三歳児はまだ脳の神経細胞が回路を作っていないはずで高度なことは考えることができないはずだし、感情も豊かではないはず・・・・でもなぜかこの三歳児は生まれた瞬間からはっきりとした自我があったし、授乳の際の羞恥プレイも恥ずかしがっていたんだよ！

どうなってんだよ！！ってやつですね。

そしてそんな三歳児の夢はガンダム00のイオリアと同じく人類の宇宙進出です。

オス！オライオリア 宇宙に行くと思うとわくわくすつぞ！！

さらに神様にもらったV型ウィルスは腸に定着したし、

アラガミコアはどうやら僕の心臓として動いてるみたい。一応精密検査されてもばれないようになっています。オラクル細胞は僕の体として動いています。

僕のコアが指令系統の中枢であり、脳は通常の脳と同じく判断とか下しています。人と道具の関係の

ように脳が人、道具が僕のコア（心臓）となっています。コアの中にマクロス、ゴットイーター、ガンダム、その他のデータが入っています。

体の中にコンピュータが入っているようなものです。V型ウィルスも制御下においているので今すぐバシユラとも対話ができそうです。でも肝心なバシユラが居ません。トホホ

オラクル細胞を利用してアラガミ化もできるし、

コアが制御下においたオラクル細胞ならどんな形にも変形させれますし、捕食形態にも神器？も生成ができます。オラクル細胞の本能「進化」も健在で捕食で得たデータをコア内部に蓄積することもできます。食べ物も食べなくても生きていけますし、無機物も食べる

ことができます。もう最強ですね。

一般的な知識は東大を受験下時点で持っていたのでIQは150はあるかと思っています。

この世界が何の世界かわかりませんががんばって生きていきたいです。

3 (後書き)

ネタがないっちゅうね

4

（アメリカ合衆国）

藍色の油を垂らしたような指に纏わり付くような暗い空、その空から生まれる純白の雪、
落ちてゆく雪を赤黒い炎が照らし、その光景を見つめる小さな子供。
赤く黒い炎を作る小さな家、子供は泣いていた。

「行ってきます。」

茶髪の小柄の少年は言った。
その声に応えるもう女性の声。

・ ・ ・

・ 「早く帰らなきゃ、せつかくお父さんが帰ってきたのに・・・。」
彼の父親はマシントック社の社長。軍の兵器の四割を製造している。
いつもなら父親は帰らない日が多い、だが今日は彼の誕生日だ。
息子を祝うために仕事を早めに切り上げて帰っていた。

少年が白い山道を急いでのぼる。

何度まころびそうになりながら。その少年は歩いて行く

木々の間から降ってくる雪を浴びながら少年は歩いて行く。

あと少しで我が家だった。

視界が何千ものシャッターを一度に切ったような激しい色に覆われる。

そして爆音。木々の破片が落ちてくる。

「えっ!?!」

少年は走っていく。何度も見てきた白いポスト、そこを曲げれば帰り着ける。

だが、そこにあつた景色は初めて見る光景だった。

砕けた屋根。押しつぶされた母屋。燃え上がる炎、見覚えがある家はどこにもなかった。

何度もまぶたをこする。頬をつねる。

八年間過ごした見紛う事なき我が家。今朝、いつもと変わらず自分を送り出してくれた。

でも、

もう無い。

あの家は無くなった。

目の前にある黒く焦げたガレキの山。

少年、イオリアシュヘンベルグはこの日、両親を失った。

淡い微睡みの中、少年は目覚める。
窓から差すほのかな色、

「もう朝か・・・」

もぞもぞとベットから這い出る。冷気が肌に突き刺さる。のそのそと洗面所へ行く。

冷たい水を顔にぶつける。頭の奥にあった眠気は水とともに流れる。

「おはよう。」

「おはよう、今日は早いわね。」

この世にただ一人しかいない母親。他愛もない話をしながら朝食をとる。

やがて時間を知らせる鐘が鳴る。

「行ってくるね」

行ってらっしゃい。と答える声。

遅れてしまうよ。と言う。

わかってるよ、じゃあ行ってくるよ。

今日もいつもと変わらない。つまらない毎日が続く。

でも家に居るときは違う、母さんがいる、クッキーを食べながら今日あったことを伝える。

母さんはその間笑っている。その笑顔を見ているだけでよかった。走る。今日は早く帰ろう。母さん達が待ってる。

今日は僕の誕生日だ。楽しみだな。

突然の爆音。遅れて木片が降ってくる。

音は家の方からした。不安だ。大丈夫だろうか。

「はあっはあっ」

見覚えのある曲がり角。あそこを曲がればいつも通りの家がある。ドアをくぐれば母さんと父さんがいる。そしてただいまと言う。それだけだ。

そこにあったのは壊れた我が家。変わり果てているけど知っている、今朝までいた我が家。

でも、もうない。たった一つだけの居場所は消えた。

「嘘っ・・・だろお・・・あああああああああー!!」

あふれ出してくる涙、力が抜けていく。膝が折れた。ズボンが雪に

埋もれる。

少しずつ霞んでいく視界。頭の奥で何かが麻痺するような感覚。ただ。どうし？と、なんでこうなったの？

大声で叫ぶ。やがて喉がつぶれる。声は出ない。でも意識はある。あいたまま閉じないまぶた。燃えていく我が家が焼き付く。

そして、何かが切れる音がした。

ベットから起き上がる陰。

ふらふらと歩いて行く。

ドアを開けその中に入っていく。

鏡を見る。その鏡に映るのは一筋の涙。

「母さん、父さん・・・・・・・・」

両親を失ってから四年経った。

「でも僕はまだあのときのままだよ。」

父親を殺したのは反アメリカのテロ集団。

同胞達を殺したのはおまえが作ったモノだぞ。だから天罰を下した。

と、

そして私は父の会社を継いだ。

今では「稀代の天才」、「殺人者」、「棺桶売り」

そう呼ばれている。皮肉なものだ。

でもそのおかげで私は目標を達成しようとしている。

あと、少しだ・・・こんな世界なんか壊してあげるよ・・・
母さん。待っててね。

4 (後書き)

主人公が歪んじまった。

「第一段階準備完了・・・。」

機械が乱雑に置かれた空間で少年はつぶやく。

その青年は誠実そうな顔つきをしている。だが、どこかが歪んでいるようにも見える。

目には隈ができ、服はずっと着たままなのか。頼りない。

「第一段階、石油エネルギーの枯渇。」

私のやっていることは人類に対する反逆だろう。と、彼は笑う。

ソレスタルビーイング、イオリアシユヘンベルグ。

彼は、アメーバ状のアラガミを散布し、V型ウィルスが発生させるフォールド波によって地下に眠る石油エネルギーだけを壊滅的な状況に追い込もうとしている。そして「準備完了」とは世界中にアメーバアラガミが散布できたことを示す。だがこの段階でのアラガミの発見は計画に支障を来す。だからV型ウィルのフォールド波を使用する。アメーバアラガミをコントロールし、狡猾に、迅速に地下エネルギーを破壊していく。これにより世界は混乱する。そして戦争が始まる。

「捕食率2パーセント。」

このまま行けば一週間もあれば完了する。

「あははははー」

あと、もう少し、もう少しだ。
そして、ソレスタルビーイングによる人類の意思の統一。
これで世界が変わる。

「こちら、サウジアラビアです。ここ最近サウジアラビアでの石油の採掘量が低下してきています。

石油生産国でも同様の現象が起こっています。」

世界各地で地下エネルギーが消失していく、そして世界は原子力、水力、風力、バイオ燃料などの資源を生産し始める。だが増えすぎた需要に生産がついて行かず、エネルギーは値上がりしていく。

だが、稀代の天才、イオリアシユヘンベルグが太陽光発電の基礎理論を発表した。

これにより、世界は太陽光発電を主軸としてエネルギー政策を発展させる。だが、この理論は一部の先進国、アメリカ、中国、ロシア、日本、などの国でしか公表していない。石油で発達した中東諸国は内紛が起こり、世界は三つの国家群に分かれる。アメリカを中心とする世界経済連合、通称、「ユニオン」、中国、インド、ロシアを中心とした、「人類革新連盟」、通称人格連、そして新ヨーロッパ共同体「AEU」

新エネルギー政策に乗り遅れた国々は滅んでいく。

新たなる資源を求めた「木星探査船団」。

半永久的にエネルギーを得る、1世紀半の時間をかけた「軌道エレベーター」、 「太陽光発電衛星」

これを守る、

AEU、イナクト

人格連、ティエレン

ユニオン、フラッグ

そして、各国家は時刻の威信をかけてゼロサムゲームを続ける。

あるところに。仲のいい二人の双子の姉妹が居ました。

彼女達は裕福でした。お父さん、お母さんが、一生懸命働いてくれました。

そのおかげで二人は元気に育ちました。

でも、彼女たちの両親は事故で死んでしまいました。

妹も事故に巻き込まれましたが帰ってきました。

両親が残した遺産。それにたかってくるアリたち。

悲しみに沈む彼女たち、そこへ、お迎えがきました、妹はどこか遠いところへ行ってしまうました。

お姉さんは、私のせいだ、私がこんなに泣き虫だから妹が連れて行かれたのだ、と、思いました。

お姉さんは努力しました、勉強、スポーツ、何でもがんばりました。

でも、妹は帰ってきませんでした。

そして、一人のまま時間は過ぎていきます。

それはソラから落ちてきました。

赤い尾を引いて。落ちてきたのは「ニホン」というところ。

日本政府はそれを調査しました。最初は人工衛星かと思われました。でも、違いました。ヒトの形をした金属の塊でした。

研究員が触った瞬間ソレは起動しました。研究員に纏わり付く「鎧」のような物体。

研究員たちは驚きました。

そして「ソレ」を解析しました。

すると、どうでしょう。

それは兵器でした。

日本政府はこれを隠蔽しました。

隕石だった、と。

日本政府は危惧しました。

宇宙には巨大な科学をもった文明があるのではないか。

「コレ」を報告すれば、宇宙についての情報を保持している国に「これ」を奪われるのではないか？

そして、その異物は限られた科学者によって、解析されていました。

それは alien、s weapon、AW1と名付けられました。

そしてこの事件により、日本は宇宙進出を始めました。

ある日、とある天才が人型の兵器を作りました。

それはインフィニットストラトス、ISとよばれるものの人の形をした兵器でした。

だが、学会はコレを否定しました。

そして起こったのが「白騎士事件」、日本の東京に向けて2300発のミサイルが発射されました。

だが、その半数以上を「白騎士」、と呼ばれる兵器が撃墜した。

それを鹵獲しようと、大量の戦闘機や軍艦が投入された。だが、すべて撃墜されました。

これにより、ISという兵器は世界に関心を示します。

ですが、ISは不完全の兵器、女性にしか使えません。

これが原因で女尊男卑の世界となりました。

開発者は日本人であったため、政府は情報を隠蔽しました。

そして、政府は驚愕しました。

白騎士に使われていた核となるものがAW1の核とまったく言うていいほど一緒でした。

このことにより、制作者、篠ノ之束は指名手配されました。

ですがAW1の核を使用した兵器は男性でも使用できました。ですが、AW1はある事件により消失しました。

そしてアラスカ条約が発表されました。日本政府は白騎士のデータをすべて世界に渡しました。

でも、AW1のデータは公開されませんでした。

そして、ある日、男性でISを使用できる人間が現れました。

7 (後書き)

やっと前置きが終わったヨ

私は、エレノア・ヘリン、アメリカの代表候補生。

私がこれから一年間在籍することになる組は、異様な雰囲気にかまれている。

「織斑 一夏くん、織斑 一夏っ」

必死に話しかける童顔の教師。

「はっはい!？」

ガタンと立ち上がる。私は彼の後ろの席なので、机にぶつかった。あちこちで起こる忍び笑い。

「あっ、あの、お、大声出しちゃってごめんなさい。お、怒ってる？怒ってるかな？ゴメンね、ゴメンね！でもね、あのね、自己紹介、『あ』から始まって、今『お』の織斑 くんなんだよね・・・」

教師を泣かす生徒、だがそれは子供を泣かす高校生のようにも見える。

ISという兵器の未完成の部分を見殺したイレギュラー、織斑 一夏、まさか彼は日本で言う不良なのだろうか。

目つきも悪いし、なぜだろう、怖い。

「げえっ関羽!？」

パンという炸裂音。だが、彼はバランスを崩し、後ろ向きに倒れる。

「バタ~~~~ン？」

机ごと倒される私、彼は、織斑 一夏、アイツはやりやがった。

「ん~~~~?、あ? 柔らかい.....ぐふううつ!!」

アイツが起きようとして手を置いた場所が私の胸、そして感触を楽しんで行きやがった。

だが私とて、代表候補生、やられたらやり返してやる、右からの鳩尾フック、だが、足りない。アイツは乙女の『初めて』を奪って行きやがったそれに対して鳩尾フックだけでは足りるわけが無い。

「キャー!! ヘンタイー死ね!!」

ここは純情な乙女を装ってたくさん殴らせてもらおう。

「痛い、悪い、悪かったて。」

「ヘンタイ、ヘンタイ、ヘンタイ.....」

アイツがわたしのストレートを止めさせようと出した手が、私の手

に当たり、軌道が変わり、私の胸に当たる。

「ツッ！」

後ろに飛びし去るがそこは教室。後ろの机に当たり意識はブラックアウト。

「んゝゝ、ここはどこ？」

欠伸をしながら、独り言、定番の台詞である。

「よかったゝ起きたか、さっきはごめんな、俺は織斑 一夏よろしく、」

と何かよくはからないことを言う織斑 一夏。初対面なのになれなれしく。しかも『さっき』ってなんのことだ？

「んん？？さっきって何のこと？」

コレは本当なぜここに居るのか全くわからない。

「本当にわからないのか？んゝ困ったな」

何か忘れてはいけないことでもあったのだろうか・・・

「ま、いいや、きみ織斑 一夏だよね、ありがとう、私はエレノ・ヘレン、エレノアだ、よろしく。」

初対面に笑顔は大事だから割居ながら自己紹介をする。すると彼は苦笑いしながら

「あらためて、織斑 一夏、一夏でいいぜ。あ、それと今、二時間目だから授業行くぞ。」

「う、うん。」

そう言いながら一夏は腕を引く。これは天然故の行動なのか？それとも・・・

ま、考えても仕方が無いな。

どうやら私は一時間寝ていたようだ。理由はわからないが、一夏が看病してくれていたそうだ。

「ふう、疲れた〜、眠いなあ〜。」

やっと二時間目が終わった頃、一夏の席を金髪のドリルが叩いていた。

「これだから極東の猿は、授業中にもかかわらずあんな破廉恥なことをするのですわ。」

『破廉恥なこと』とはなんだろう、朝の時間の記憶が無いのだが・

一夏はそんなことをしたのか・・・寝ているときに触られなかっただろうか・・・気になる。

あっチャイムが鳴った。席に戻らなくちゃ・・・戻ってるけど。

「それではこの時間は実戦で使用する各種装備の特性を説明する。」

「ああその前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないといけないな」

ざわめく教室。女子ってこんなの多いよね。まあ私も女子だけど・・・。

「はい。織斑くんを推薦します！」

ビクンッと跳ねる一夏。そんなにびっくりするか？普通。

「お、俺っ!？」

混乱から回復した一夏がガタン、と机を揺らす。

「では候補者は織斑一夏……ほかにはいないか？自薦他薦は問わないぞ」

「待ってください！納得がいきませんわ！」

番！机を叩いて発射されるロケット。

「そのような選出は認められません！大体、男がクラス代表だなんていい恥さらしですわ！」

わたくしに、このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間あじわえとおっしゃるのですか！？」

あーうるさいロケットの噴射音ってこんなにうるさかったかな？

「実力から行けば、私がクラス代表になるのは必然。それを、物珍しいからという理由で極東の猿にされては困ります！」

私はこの島国にISの技術を修練しにやって来ているのであって、サーカスをする気は毛頭ございませんわ！」

よく日本国内でそんなこと言えるな、それに元、日本代表と日本代表候補生の前でそんなこと言ったら殺されるんじゃないか？……

逆に才能だわ、コレ。

「いいですか！？クラス代表は実力トップになるべき、そしてそれは私ですわ！」

あゝもうこれかわいそうだ・・・よし、

「セシリアさんを推薦します。」

「エ、エレノアさん？ありがとうございます。」

へえけっこう愛想いいね

「ふん、我々は先進的文化を持っていますがあなたたち極東の猿たちは我々の文化をまねしたただけであって文化としても後進的な――

カチン、と一夏がキれた。

「イギリスだってたいしたお国自慢ないだろ。世界一まずい料理で何年覇者だよ」

すげー金髪ドリルが茹で蛸になってる。ま、一応私の祖国もイギリスなんだけど・・・この程度では怒らんよ、事実だし。

「あつ、あつ、あなたねえ！わたくしの祖国を侮辱しますの！？」

いやいや、自分から仕掛けただろ！！つか自業自得だろ。

「決闘ですわ！」

お、これで一夏の戦闘能力が測れるな。

「で、ハンデはどうする？」

「あら早速お願いかしら？」

「いや、俺がどのくらいハンデをつけよーかなと」

「お、織斑くん本気言ってるの？」

「男が女より強かったのって、大昔の話だよ？」

みんな笑っている。稼働時間が物言うISでちよつとしか動かしたことのない一夏がそんなこと言えるのか・・・ISは舐められているのか・・・しかも相手は国家代表候補生だぞ。

「一夏。ISを舐めてもらったら困るよ。私たちは今まで本気で人生をかけてやっているよ。でも一夏は今、ここに居るIS操縦者の努力を貶したんだよ。だからね、私君に常識を教えてあげるよ。オルコットさんと一緒に楽しい勉強をしようよ。」

ニコと笑顔全開で言い放つだけどさつきを含めて。

「エ、エレノアさん？えっ――」

「さて、それでは勝負は一週間後の月曜日、ダイサンアリーナで行う。三人はそれぞれ用意をしておくように。それでは授業を始める」

8 (後書き)

微妙な終わりになった。

機体名 死の凱旋

元はアメリカで開発された銀の福音と対の機体。
エレノアがテストパイロットをしている。

黒を基調としている、翼は存在しない。、オーバーテクノロジーの
重力制御システムにより

実質的には質量はゼロに等しい。慣性制御を使用し、ブーストを最
低限の使用に押さえる。

アクティブステルスにより隠蔽性も優れている。
完成した光学迷彩を使用し、目視不可能になる。

アメリカのマシンテック社に所属。

どこかの秘密結社とともに作成。まだ公開していない技術も使っ
ている。

改造がされておりカラー以外はほぼ別物。

全身装甲。待機状態はP53アームドインプラントインプラントと
同じ形状。

現行のほぼすべての隠蔽技術を使っている。

装甲は厚め。動きは少しのろい、そのために光学迷彩を使用してい
る。無音で移動ができる。

武装

腰に四丁のプラズマ収束砲を格納。

足裏に隠しビームサーベルを装備。

主武装はデスガンダムのようなビームサイズ発することのできる鎌、
ビームサイズを発生しなくても鎌として使用が可能。変形で銃にす

することもできる。

ハイパージャマーを装備していてカメラやレーダーにうつることもなく、

破壊することもできる。

迷彩皮膜を装備、人間の肌ごと透明化できる。装備者のみ。

烏・・・背中上部の小型ミサイルの一斉発射の場合は一度に三十発発射できる。ミサイルはジグザグの軌道を取るもの、相手の軌道を読むもの、直線的なきどうを描くものがある。

背中下に巨大な楔状の黒い武器がひとつ格納されてる。

墓標・・・パイルバンカーのような兵器で、相手に打ち込むと任意のタイミングで炸薬が爆発し、

相手を地面に縫い付けることができる。絶対防御も貫通し、ミンチのようにすることもできるが調節してある。

拡張領域には未発表装備と通常装備の予備が入っている。

両肩には盾がありその下にバルカン砲二丁搭載。

両腕に小型の盾を装備している。

動力源は実用段階の熱核反応タービン。

形は鎌を持ったお洒落な日本甲冑。

頭部はセンサー類の固まり。ハイパージャマーなど、攪乱兵器の影響は受けない。

熱源、湿度、温度、紫外線、すべてのセンサーを装備。

このISコアには人格はなく、男にも使うことができるが、認証ロックスが かかっている。

人格の代わりにSYSTEM—JUDAH ユダ・システムを補助に使用してミサイルの軌道を有効なものにしている。

エネルギー転換装甲によってほぼ突破不可能の装甲を使用している。

10（前書き）

一応書いてきます。

黒い翼、鳥、 死の凱旋が装備している小型ミサイル。 からす（鳥）

青い雫、 ブルーティアーズのBT兵器のこと

羽毛、 装甲

飛び立つ力、 シールドエネルギーのこと

嘴、 スターライトmk?のこと

※本編のこと

第三アリーナ 代表決定戦

「さあやろうじゃないか。」

どこまで楽しませてくれるかな。つぶやく死に神。

「さあ、踊りなさい！ 私、セシリア・オルコットと、ブルー・ティアーズの奏でる円舞曲で！！」

地を這いずる死神、空を舞う青い小鳥、対称的な二人、地面を削る青い光、こぼれ落ちる四つの青い雫、雫は青い波紋をうむ。

「はは、どうしたよ。その程度かよ」

波紋は不自然に曲がり届かない。

「くっ」

雫は一つずつ消えていく。そして、主人を守り敵を討つ忠実な青い雫は破片となっていく。雫は羽根であり爪でもあった。雫のない小鳥に残ったものは小さく脆かった。

死神の背中から三十の黒い翼が飛び立つ。黒い翼たちはそれぞれの意思を持って小鳥を追う。そして羽根を失った小鳥は地に落ちる。落ちた小鳥は鳥に群がられる。

体を守るための羽毛はむしられていく。傷ついた体から血が流れ出

すように飛び立つ力を失っていく。

「まだですわ!!」

凶暴な黒い羽根は去った。傷ついた小鳥は残った嘴で最後の抵抗をする。

だが、死に神はどこにも居ない、本能が警告の鐘を鳴らす。

小鳥は飛ぼうとした。力を振り絞った。

だが死に神はそれを許さない。死神の鎌が小鳥の息の根を絶つ。力を失った小鳥は崩れ落ちる。

「勝者エレノア・ヘリン。」

静まりかえる会場。圧倒的すぎる勝利、それは畏怖をもって現れる。

漆黒の衣を脱ぐ死神、現れる金色の髪を持つ白い少女。死神とあまりにも対称的で美しい彼女、この場に居合わせた者の目は幻想的な彩りにあふれていた。

「ふん、なかなかですわね」

敵わないとは言えない。それが代表候補生であり貴族の端くれである彼女のプライド。

「どうも。」

二人は握手し、それぞれのピットに戻る。

そして四日後にもう一度試合が行われた。

10 (後書き)

がんばってみた

「くそっ。」

吹き荒れる青い嵐、その嵐の中に白い鎧をまとった少年、織斑一夏はいた。

「シールドエネルギーが・・・」

そのつぶやきはかき消される。

百式、それが彼のISの名前この嵐を作り出しているのがIS、ブルーティアーズ黒い死神に翻弄され、いたぶられ倒れたIS、死神に弄ばれたときのか弱さは今はなく青い装甲を怒りにふるわせている。試合は一夏の劣勢だった。

「私が代表候補生のセシリア・オルコットですわ！

もう恥をかけませんの！！」

青い嵐の中白い光が起こる。

「これが俺のIS・・・俺専用のISか！！」

ファーストフェイズを完了した百式の姿は嵐の中にいたとは思えないほどの美しさを持っていた。

「あ、あなた、今まで初期設定で戦っていたの！？」

「わからない、でも今ならやれる！」

ファーストフェイズでは発動しないはずのワンオフアリティ、零落白夜を発動させ、斬りかかる一夏。

ブルーティアーズの攻撃を避けながら、避けるだけでなく落としていく、そして、懐に入り斬りかかろうとした。

「かかりましたわ！」

驚愕に見開く目、信じられないとばかりに見開く、そのせいで対処が遅れた。

「くそっ」

発射された二発のミサイルが直撃する。

何でだ、心の中でも口でも毒づく。シールドエネルギーは二桁を切っていた。

だが一夏はそれに気づかない。

崩れた姿勢を立て直す、無理な姿勢のせいで体が揺れる。

「そこだっ！」

三つのBT兵器の隙を突く、動かないセシリアに一撃を入れようとした。だがやはりミサイルに阻まれる。だが、そのミサイルを腕で防ぐ、シールドエネルギーはあと僅か。

「学習しませんわね!!」

セシリアはわざと隙を作った。そして一夏はそれに乗った。時間差をおいて放たれる四つのミサイル、そして背後からは三機のブルーティアーズ、セシリアの機体の由来であり、その象徴。青い雫は日光を青く反射する、銃口が青く煌めく。そしてはき出される青いエネルギーの奔流、防ぐことのできなかったミサイルによって姿勢は崩される、そしてそれを青い槍が貫いた。

「勝者、セシリアオルコット!!」

「ありがとう、やっぱり専用機は強いな。」

「わかってもらえたでしょうか。」

「ああ、さっきはごめんな、頭に血が上っていたみたいだ。」

「こ、こちらこそですわ」

沸き上がる歓声、一方的な試合であっても試合は試合、勝利の余韻が抜けないのかセシリアは赤い顔をする。

シャワールームに水音が響く、

「織斑一夏、男・・・」

男というものは自分の財産を手に入れようとしてきた者達の象徴であり、そのものであった。だが、織斑一夏、彼のような男には出会ったことがなかった。

セシリア・オルコットの見た男、織斑一夏は男としての魅力にあふれていた。そしてそれに触れたのが年頃の少女となれば恋をするだろう。

「逃がしませんわ・・・」

セシリアは織斑一夏のことを痛切に知りたいと思った。

アリーナからの帰り道、

織斑一夏は幼なじみの少女、篠ノ之箒とともに寮に戻る。心なしか彼女の頬は赤い。

好きな人と二人きりで歩く、たったそれだけのこと、それだけのことでもううれしい。

「どっちが代表なんだろう。」

ぽつり、と呟く一夏。

「そんなのエレノアとかいう女だろう。」

女、自分も女だろうに、自分以外の女は敵なのだろう。好きな人が女の話をしただけでも気に入らない。

「そうだろ、あんなに手こずった相手に簡単に勝ったからなあ・・・」

感慨深げに言う

「私は、あの女はいやだな」

戦い方、それに女である、自分の好きな人をとるかもしれない、しかも、あんな事まであったのだから、そんな意味を込めていた。

「そうだな、強そうだな、それに・・・」

言葉を濁す、あの娘はなんだか悲しそうな目をしていたから・・・どうしたんだろう。箒はそれ見て勘違いをする

「ま、まさか・・・」

一夏はあの女の虜になったのか？

「ん?」

（そんなことはないっ！）

自分だけの人であってほしい、でもその本人は気づかない、ふりをしているかもしれない、そんな気持ちになる。

「疑心暗鬼になってもしかたがないな・・・」

誰でも疑っていたらいけない、と喝を入れる。

「箒？どうした？熱でもあるんじゃないのか？」

額に触れる一夏、そして箒の体温は上がっていく。

「い、一夏？」

（こんなところでそんなことされたら恥ずかしいじゃないか！それに、恥ずかしい・・・）

「熱があるみたいだな。おんぶしてやろうか？」

とても心配した顔で言う。

「い、いいっ！」

走って逃げる。

（そ、そんな顔するんじゃないか）

「どうしたんだ？あいつ」

こんな事になっても気づかない。これが織斑一夏。

夕焼けは赤く微笑みながら二人を見守っていた。

「ラブラブだな。」

その姿を遠くで観察していた少女、エレノア、

「それにしても・・・悪いことしたな・・・」

（機体大丈夫だろうかなあ・・・怒ってないかな・・・お姉ちゃん・・・）

11（後書き）

姉妹ふらぐです

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6768y/>

I S 転生者の夢

2011年12月2日05時49分発行